様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ２１ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８０９８０

研究課題名（和文）自伝的記憶の分布，想起内容，機能の関連の検討

研究課題名（英文）Relation of distrubution, content and function of autobiographical memory

研究代表者
槙　洋一（Maki, Yohichi）

北海道大学・文学研究科・専門研究員

研究者番号：９０５８２７１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：自分が経験した出来事に関する記憶を自伝的記憶という。本研究では，第一に，10代から70代までの参加者に自伝的記憶の機能を測定する尺度に答えるようにもとめ，世代差（若年＞高齢）と性差（女性＞男性）があることを見出した。第二に，10代から50代までの参加者に鮮明な出来事を３つ思い出してもらい，経験した年齢とそれぞれについて自伝的記憶の機能を測定する尺度に答えるようにもとめた。その結果，鮮明な出来事の場合，反対の世代差（若年＜高齢）を見出した。

研究成果の概要（英文）：In study 1, we investigated whether age and gender differences show the three functions of autobiographical memory. Participants (N = 1070, ages 15-79) completed the original Thinking about Life Experiences (TALE) Questionnaire. Two-way ANOVAs (gender (2) x age group(7)) were conducted using total score for each functions as the dependent variables. For an effect of gender, females reported higher levels of the self-function and social-function than males. For an effect of age, young adults reported higher levels of all three functions than older adults. In study 2, participants (N = 190, ages 18-59) were asked to recall three vivid memories, then they rated each memory using TALE Japanese version. Participants were divided into three age groups. Two-way ANOVAs (age group (3) x order (3)) were conducted with the same way as study 1. For an effect of age, young adults reported lower levels of the self-function and social-function than older adults.

研究分野：社会科学

キーワード：自伝的記憶　機能　世代差　性差

１．研究開始当初の背景

(1) 現在から過去に至る日常的な出来事に関する記憶はさまざまな場面で想起され，利用されている。こうした自分が経験した出来事に関する記憶は自伝的記憶と呼ばれている。自伝的記憶は，ライフスパンという時間軸上で検討されることも多い。ライフスパンにおける自伝的記憶の分布とは，人が生まれてから現在までの間で，どの時期に経験した出来事を，どの程度想起するのかという問題を指す。そして，分布には，レミニセンス・バンプとは，10 代から 30 代の出来事の想起量が多いという現象があり，高齢になるほど頑健にみられることが知られている。レミニセンス・バンプの原因についてはさまざまな要因が複合していると考えられている。
一方，近年，自伝的記憶の分布だけでなく，その機能についても研究が盛んになっている。つまり，自伝的記憶を人は何のためにどのように利用しているのかという問題である。現在，自己を確認したり（自己機能），会話するときの話題を提供したり（社会機能），自分を目標に対して動機づける（方向づけ機能）といった機能があることが指摘されている。そして，それらの自伝的記憶の機能を測定する尺度として，Thinking About Life Experience Scale(TALE) (Bluck,Alea, Hebermass and Rubin,2005)が開発されている。
　しかし，自伝的記憶の分布，想起内容と機能の研究はそれぞれ別々に行われており，その関連を調べた研究はほとんどない。自伝的記憶の分布には高齢になるほど，10－30 代の出来事を多く思い出すレニミセンス・バンプがみられるので，その機能も想起者の年齢に応じて変化していく可能性がある。しかし，自伝的記憶の機能については性差や文化差がみられることが報告されているが(Maki, Kawasaki, Demiray and Janssen, 2015)，世代差は報告されていない。そこで，まず自伝的記憶の機能に世代差がみられるのかどうかを調査し，次にライフスパンにおける自伝的記憶の分布と機能の関連を検討していく。また，どのような内容の記憶がどのように使用されているのかをみる研究はこれまでなされていない。そこで，想起内容と機能の関連を探索的に調べる。

２．研究の目的

(1) 若年層から高齢層までの日本人の参加者にどのような目的で自分の過去の経験を想起するのかの質問群（TALE）に回答することをもとめ，自伝的記憶の機能にどのような世代差および性差があるのかを調べることである。世代差について，社会感情選択性理論 (Carstensen, Fung, & Charles, 2003)に従えば，年齢にともなって、「人生の残り時間はどのくらいか」という視点が変化していき、その時々の目標によって行動が動機づけられる。つまり，若年者では「人生の残り時間はたくさんある」と認識することで，資源を自分の将来の展望，対人関係の維持など未来志向のために使おうとする。これに対して，高齢者は「人生の残りはわずかだ」と認識することで，資源を身体的健康，感情的な安寧の維持などの現状維持に使おうとする。従って，３つの機能は若年者のほうが高齢者よりも得点が高くなると予測される。一方，性差について，社会文化的発達理論(Nelson & Fivush, 2004)に従えば, 幼児は主養育者との過去の出来事に関する会話の中で自伝的記憶を発達させる際に，会話のスタイルが男女で異なるため，性差が生じると考えられている。女児に対しては，内容を詳細に語るようにもとめるのに対して，男児には発話の反復が多い。その結果，女児は男児よりも社会的出来事，対人関係，感情を多く報告し，
成人でも同様の現象がみられるという。従って，自伝的記憶の機能においても，女性の方が男性よりも頻繁に想起する傾向がみられると予測される。

(2) 参加者に鮮明な出来事を３つ想起してもらい，それぞれの出来事を経験した年齢，想起内容，およびその機能を測ることで，分布，想起内容，機能の関連を調べることである。TALE は人が日常的にどのように自伝的記憶を使用する傾向を測定しているのであるが，個別の記憶をどのように使用しているのかは今まで報告されておらず探索的な試みになる。

３．研究の方法

(1) 600 名の日本人の 30 代から 60 代が参加した。その内訳は, 30 代 150 人（男性 59 人，女性 91 人），40 代 150 人（男性 80 人，女性 70 人），50 代 150 人（男性 79 人，女性 71 人），60 代 150 人（男性 86 人，女性 64 人）であった。インターネット調査会社に委託し，ブラウザ上で質問項目に回答するようもとめた。質問項目は，参加者の年齢，性別，被教育年数，過去の出来事について，普段どの程度考えるか（考える頻度），過去の出来事について，普段どの程度他者に話すことがあるか（話す頻度），という２項目に関して，”1=まったくない”～”6=非常によくある”の 6 件法で回答するよう求めた。その後，自伝的記憶の機能尺度(TALE)（Bluck et al.,2005)について 24 の質問項目の日本語訳の尺度を使用した。各項目に対して，”1=まったくない”～”6=非常によくある”の 6 件法で回答するよう求めた。なお，TALE には日本語版 8 項目(落合･小口,2013)が発表されていたが，先行研究(Maki et al,2015)との整合性をとるためにオリジナル版 24 項目の日本語訳を使用した。

(2) 研究(1)でみられた世代差をより明確にするために 10 代 150 人（男性 75 人，女性 75 人），20 代 150 人（男性 75 人，女性 75 人），

70 代 150 人（男性 75 人，女性 75 人）に，研究(1)と同じ質問項目を実施した。また，男女比を同等にし，性差を検討するため，30 代男性 20 人にも同様に実施した。

(3) 10 代から 50 代までの 230 人が参加した。回答に欠損があった 40 人を除外し，190 人(男性 29 人，女性 161 人)を分析対象とした。その後，参加者の年齢と職業に応じて 3 つの年齢群に分けた。その内訳は，18-23 歳群（大学生）71 人(M =19.24，SD=0.70)，25-39 歳群（社会人）71 人(M =32.87, SD=4.10), 40-59 歳群 48 人（社会人）(M =44.31，SD=4.30)であった。参加者に鮮明に覚えている出来事を３つ想起するようもとめた。その後，１つずつ想起内容の概要を記述し，いくつかの質問項目に回答した。質問項目は，参加者の年齢，性別，被教育年数であった。そして，鮮明な出来事を１つ想起し，内容を記述した後に，出来事を経験した年齢，出来事の重要性，繰り返し想起する頻度，想起したときの気分，感情を喚起される程度（すべて７件法）について回答した。その後，TALE 日本語版(落合・小口,2013)８項目について回答した（６件法）。この手続きをそれぞれの出来事に対して計３回繰り返した。

４．研究成果

(1) TALE24 項目について，主因子法，プロマックス回転による因子分析を行った。「自己機能」）（α=.88)，「社会機能」）（α=.90)，「方向づけ機能」(α=.93)の 3 因子が抽出された。各因子のうち，因子得点が.40 以上の項目をまとめて，合計得点を算出した。参加者を年齢によって，30 代，40 代，50 代，60 代，の 4 つのグループに分け，性別ごとに自己機能の合計得点，社会機能の合計得点，方向づけ機能の合計得点をそれぞれ従属変数とし，世代(4)と性別(2)を独立変数とする２元配置分散分析を実施した。その結果，方向づけ機能に関して，性差および世代差はみられなかったが，社会機能に関して，性差および世代差がみられた。女性は男性よりも得点が有意に高く，30 代は 60 代よりも得点が有意に高かった。自己機能に関して，世代差，全体的な性差はみられなかったが，30 歳代群においてのみ性差がみられた。本研究では，自伝的記憶の３つの主要な機能は日本の 30 代から 60 代の参加者でも確認され，先行研究(Maki et al., 2015)の結果を再現した。3 因子モデルが頑健であることを示している。次に，従来の研究では報告されていなかった TALE で測定した自伝的記憶の機能に世代差が存在することを明らかにした点で新しい知見を得た。また，先行研究(Maki et al., 2015)と同様に，西洋文化圏の先行研究では確認されていない性差が日本人の参加者でみられることを再現した。

(2) 研究成果(1)では，参加者を 30 代から 60 代としたために，世代差が明確にわからなかった。そこで，新たに 10 代，20 代，70 代からの参加者に対して同じ調査を実施した。また，研究(1)では，30 代の男女比に偏りがあったため，追加し修正するために 30 代男性 20 人を実施した。研究(1)の調査と合わせた計 1070 人を分析対象とし，同様の分析を実施した。TALE24 項目について，主因子法，プロマックス回転による因子分析を行った。「社会機能」）（α=.91)，「方向づけ機能」）（α=.89)，「自己機能」（α=.91)の 3 因子が抽出された。各因子のうち，因子得点が.40 以上の項目をまとめて，合計得点を算出した。参加者を年齢によって，10 代群，20 代群，30 代群，40 代群，50 代群，60 代群，70 代群の 7 グループに分け，性別ごとに自己機能の合計得点，社会機能の合計得点，方向づけ機能の合計得点を算出した。そして，それぞれ合計得点を従属変数とし，世代(7)と性別(2)を独立変数とする２元配置分散分析を実施した。その結果，世代差が３つの機能でみられた（図 1)，自己機能はについて，10 代群，20 代群は 40 代群，50 代群，60 代群，70 代群よりも得点が有意に高かった。方向づけ機能について，10 代群は 40 代群，50 代群，60 代群，70 代群よりも得点が有意に高かった。社会機能は 10 代群，20 代群は 60 代群，70 代群よりも得点が有意に高かった。

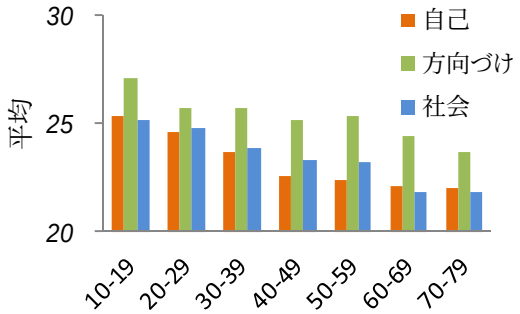

図1　3つの機能における世代差

また，性差は自己機能，社会機能でみられた（図 2)。この２機能について，女性の方が男性よりも得点が有意に高かった。また，交互作用についてはいずれの機能でもみられなかった。

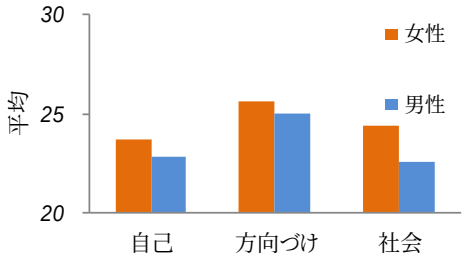

図2　3つの機能における性差

研究方法(1)(2)では，方向づけ、自己、社会

機能のすべてで若年群(10 歳代群)は高齢群(60 歳代群, 70 歳代群)よりも得点が有意に高いという世代差がみられた。この結果は社会感情選択性理論に基づく予測と一致する結果であった。同時期にドイツで行われた研究(Wolf & Zimprich, 2015)でも同様の傾向がみられている。従って，自伝的記憶の機能の世代差が生じる傾向には文化差はなく，普遍的である可能性がある。また，先行研究(Maki et al.,2015)と同様に日本人の参加者は女性のほうが男性よりも，自己機能と社会機能をよく使用している傾向が示され，社会文化発達理論による予測を支持していた。しかし，デンマーク，ドイツなどの西洋文化圏の先行研究(Bluck et al., 2005; Wolf & Zimprich, 2015)では性差は示されておらず，日本社会における性役割に関する社会文化的影響を反映している可能性がある。この点については，他の調査でより詳しく調べる必要があるだろう。

(3) 参加者に鮮明な出来事を３つ想起してもらい，それぞれの出来事を経験した年齢，想起内容，およびその機能を測定した。自伝的記憶の機能について，自己機能，方向づけ機能，社会機能の合計得点をそれぞれ従属変数とし，年代(3)×順番(3)を独立変数とする混合計画 2 要因分散分析を行った。その結果，自己機能と方向づけ機能に 40-59 歳群および 25-39 歳群のほうが 18-23 歳群よりも有意に高いという世代差がみられた (図 3)。

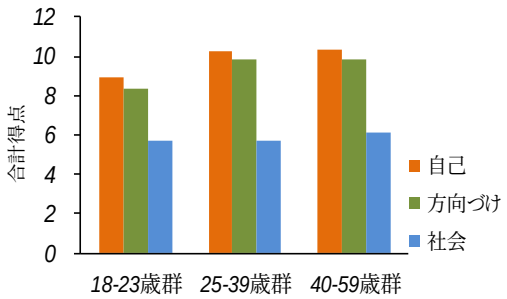

図3 年代群におけるTALE得点

次に，出来事を経験した年齢と各機能得点との相関をみると，自己機能(r= .19)，方向づけ機能(r= .25)，社会機能(r= .22)と有意に弱い正の相関がみられた。現在の年齢と近いほど，それぞれの目的のためによく思い出す傾向が弱く示された。また，分布との関連とみるために，出来事を経験した年齢によって 10 歳代から 50 歳代の時期に分け，想起時期によって各機能の得点の違いをみた。その結果、いずれの機能にも差がみられなかった。

さらに，1 回目に想起した出来事の想起内容を感情によって，ポジティブな出来事（N=43)，ネガティブな出来事(N=45)，中立な出来事(N=102)に分類した。その後，それぞれの機能の得点を従属変数にし，世代(3)×感情価(3)の 2 要因分散分析を行った。その結果，自己機能，方向づけ機能、社会機能において，世代差や感情価による差，交互作用に有意差はみられなかった。

研究方法(3)では，自伝的記憶の３つの機能のうち，自己機能と方向づけ機能がより高齢になるほど高くなる傾向を示した。これは新しい知見である。これに対して，研究方法(1)(2)のように，従来の研究では単に TALE を実施し，日常的な傾向を測った先行研究では高齢になるほど得点が低くなる傾向がみられた。このことから，自伝的記憶の機能は普段の想起傾向と特定の記憶をどのように使用するかという問題は異なることが示唆される。しかし，参加者の人数の関係で年齢群の設定が明確でないので，新たにデータを追加して分析する必要があるだろう。さらに，自伝的記憶の分布、想起内容と機能の関連については本研究から期待した結果は得られなかった。想起内容については，感情価ではなく，他のカテゴリーで分類し直すことが必要であろう。

(4) 主な研究成果を要約する。第一に，年層から高齢層までの日本人の参加者に自伝的記憶の機能を測定する尺度に答えるようにもとめ，３つの機能すべてで世代差があり，自己機能と社会機能に性差があることを見出した。特に，世代差は新しい知見であった。第二に，10 歳代から 50 歳代までの参加者に鮮明な出来事を３つ思い出してもらい，経験した年齢とそれぞれについて自伝的記憶の機能を測定する尺度に答えるようにもとめ，自己機能と方向づけ機能で成人期中期群(40-59 歳)および成人期前期群(25-39 歳)のほうが若年群(18-23 歳)よりも高いことが示された。自伝的記憶の機能は日常の想起傾向と特定の記憶をどのように使用するかという問題で異なる可能性を示した。

<引用文献>

① Bluck, S., Alea, N., Habermas, T., & Rubin, D. C. (2005). A tale of three functions: The self-reported uses of autobiographical memory. Social Cognition, 23, 91-117. doi: 10.1521/soco.23.1.91.59198

② Maki,Y., Kawasaki, Y., Demiray, B. & Janssen, S. M. (2015). Autobiographical memory functions in young Japanese men and women. Memory, 23, 11-24. doi: 10.1080/09658211

③ Carstensen, L., Fung, H., & Charles, T. (2003). Socioemotional Selectivity Theory and the Regulation of Emotion in the Second Half of Life. Motivation and Emotion, 27, 103-123. doi:10.1023/1024569803230

④ Nelson, K., and Fivush, R. (2004). The emergence of autobiographical memory: a social cultural developmental theory. Psychological Review, 111, 486-511. doi:10.1037/0033-295X.111.2.486

⑤ 落合 勉、小口 孝司、日本語版 TALE 尺

度の作成および信頼性と妥当性の検討、心理学研究 、84 号、2013 年、508-514. doi:10.4992
⑥ Wolf, T., and Zimprich, D. (2015). Differ-ences in the use of autobiographical memory across the adult lifespan. Memory, 23, 1238-54. doi: 10.1080/09658211

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　0 件）

〔学会発表〕（計　4 件）
① 槙　洋一　鮮明な自伝的記憶における機能の世代差、日本心理学会第 81 回大会、久留米大学（福岡県久留米市）、平成 29 年 9 月.
② 槙　洋一　自伝的記憶の機能の世代差と性差、第 14 回認知心理学会シンポジウム、広島大学（広島県東広島市）、平成 28 年 6 月.
③ 槙　洋一　自伝的記憶の機能の世代差と性差、北海道心理学第 62 回大会、北海道医療大学（北海道札幌市）、平成 27 年 11 月.
④ 槙　洋一　自伝的記憶の機能の世代差、北海道心理学第 61 回大会、小樽商科大学札幌サテライト（北海道札幌市）、平成 26 年 11 月.

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
槙　洋一　（MAKI, Yohichi）
北海道大学・大学院文学研究科・専門研究員
研究者番号：９０５８２７１８
(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）